

海峽

文庫  
17  
54

3

文庫  
17  
54

5  
4329  
3





5  
4829  
3

丁酉年世乙二注釋

新撰  
舟子句集

丁酉年世乙二注釋

蘇桐翁像

做俳諧六家集所載之圖

烏黑

腰心



島田  
藏書



謝蕪村傳

飯人子撰

元祿以還俳歌者流接踵而起。不暇口數而指僕也。然其吐  
囑豪放而奇警。飄逸而洒脫。時借古詩。巧出新意。不襲他人  
牙後一字者。無謝蕪村若焉。蕪村本姓谷口氏。名寅。攝津人。  
為人磊落不羈。家近毛馬塘。與漢夫白丁締交。時被酒歡噱。  
生計漸窘。妻子告饑。笑曰。我且為釣徒矣。乃出鬻其所獲于  
市。以給食。常歸過酒肆。異香衝鼻。不能自制。傾囊立引數太  
白。陶然而歌。妻子交謫。不顧也。性好讀書。博涉稗史。野乘。又  
善畫。宗黃大癡。其於俳歌。初師沾山。後從早野。已人於江戸。  
為入室弟子。既而歷游奧羽諸州。遂入京師。住一乘寺村。號  
夜半亭。蓋巴人即世。襲其號也。平生高自標置。眇視王侯遠  
迹。望其風采。爭來執贄。而則吳春九老。俳歌則几董月居。皆  
一時之選也。於是蕪村之名著于天下。蕪村常語。門生曰。在  
之論俳歌者。動輒立門戶。縱慶憎。或容或不容。我則異於是。  
英雄可容。兒女可容。神仙儒佛。木魅山魈。無一不可容者。要  
在俗脫俗耳。果能脫俗。所謂聞隻手聲之妙出矣。是化邪而  
禪者。非耶。本人情。通世故。樵夫謳焉。牧童歌焉。且多識禽獸  
草木之名。是俳歌而詩者。非耶。漁論有云。名家不立門戶。而  
門戶自在焉。廣求藝苑。旁訪才人。以為吾藥籠中物。隨收隨  
用。我於俳歌亦如是而已矣。蕪村於畫。亦得三昧。與池大雅



齊名。喜作山水人物。筆墨酣暢。有兔落鶻脫之概。識者竊惜其為俳歌所掩也。天明癸卯。冬十二月二十五日病歿。年十八。葬於一乘寺村。金福寺。芭蕉菴側。菴芭蕉翁常寓處。配某氏。生一女。婿名不傳。京師人寺村百池。蕪村之門生也。慨其死而無碑碣。謀建之。不果而歿。後明治壬午。值蕪村百年忌辰。適百池亦丁五十年。於是孫百僊。捐貲建碑。以成其志焉。所著有新花摘。七部集。蕪村文集。蕪村句集。其生之地。屬天王寺。以蕪菁名。故號蕪村。蕪村字號甚多。曰長庚。曰宰鳥。曰春星。曰三果。曰東成。曰四明。曰碧雲洞。曰白雪堂。曰紫狐菴。曰落日菴。蓋臨時漫稱。亦可以見其為人矣。

飯人子曰。蕪村者。畫師耳。俳歌師耳。而畫之與俳歌。識見超卓。厭倒時流。其襟度快活。塵芥名利。嘗游丹之與謝湖。愛其勝景。嘯傲忘歸。曰。我死即埋骨乎此。遂更姓與謝。後修為謝。明末柳敬亭。本姓曹。少時無賴。困甚。以演史遊。一日過江。休大柳下。撫其樹曰。嘻。吾今氏柳矣。後二十年。金陵有善談論柳生。車馬輻輳。門前。則嚮年休樹下者也。其事殆與蕪村相類。亦奇矣。嗚呼。蕪村死後。僅一百年。而其履歷不詳。子孫無存者矣。然流風餘韻。使後人思慕不能已。豈可以尋常畫師俳歌師視之乎哉。



古事記

海邊を月夜に

しるるを

しるる也

用立長しるる也

筆

二  
か



蘭亭序

東

東

東

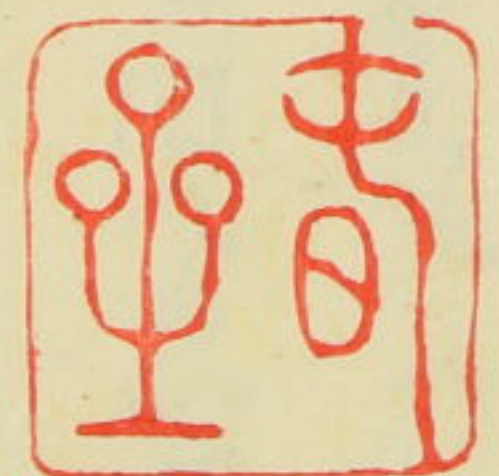


藝村  
江子方

六十七翁謝寅字

東成謝春星

子方





- 一 松遺せしもの洒竹
- 一 編輯増訂せしもの休冷と飯人
- 一 浄書せしもの竹冷
- 一 青縁を画しきしもの雨谷
- 一 題簽抄しきしもの葉

以上

舟のふるまふ拾遺

春の部

歳旦辞

歳旦をまゝし初なる俳諧師  
まづやねらふる木をこし

大和のふたなる何來の

らる本邦のなまこ

大和何ふいの字をを貝の筆。如  
低ふ末にさるなまこや直下り



舟のふるまふ拾遺  
春の部  
歳旦辞  
大和のふたなる何來の  
らる本邦のなまこ



撞木卑くうらなす西んさうさめ  
梅園より禪川はるるまに卯  
笈生みぬ古巢にそくく梅二輪  
御忌のぬ時あふまのぬり

春風馬慢曲

馬慢ハ毛馬塘也大阪東成郡  
毛馬村にあり昔毛の故園也  
いふ幼時此堤上に遊りて  
抱ふる由その文集に見ゆ

春風馬慢曲

菰入や浪ををまき長柄川  
春れや堤もりぬ家まき

茶店の志波の子僧をたて

慇懃にせ恙を智る一旦

儂り春ををを呈送む

一軒の茶見世の柳をいりり  
閑の戸の火鉢わらふ海を  
海苔掬ふぬの二重や朧月  
伽羅をさす人さう物や紙月  
おぼろ物や人さう物や紙月  
山寺や鐘の音の鐘の音  
摩訶を洗つて汲むやまのお  
春の水山なを國をたれり



鳥帽子着て浮き舟に渡る春の水

粟飯一握の爲は五十年の

歡樂をむすべしとせんらん

善妙も抱ひたよと就れども

と後をいふをいふよと

まをるやせまの ちかす野の夢

捨りけり田にーよぬの冬那

畑打やまのやまも人えたるれ

鋤の賛

畑に田よ打ちの鋤や山穂を

種るちりて降るやあけのやまは

帆風のふとー流きん春の海

泳ぐ時をいふなまをすの蛙水

るらるの首十億のよとたけぞり

陽のやまをすまを 解るこころ

ゆらゆらとる谷の根をさくら

山寺の冷飯をまは 桜の那

噴にも散るをえとー山橋

鳥帽子着て浮き舟に渡る春の水



石ころも都もさきの花より

隠は掘のけい文よ

草のむくもなまのうくもさきの

花の淵や花の淵を捨り

昔年の扶負

けいすの度くも掃ふ花をさ

檜笠辞

花散りて力の下園や捨り

守りたらばをさしや角

嵐をにりうて十四人の俳

仙を画きてあるに賛

詞強きよれ

むね月夜て文斯よあらねか

志の見る見

春もやいよ那もよま

茶のむよ備の脚のさし

茶の地にけりもすのめ夫捨り

山さきのあらしも春のさ

花や淵や  
捨りてにちるを捨り  
りうに作る



花のまゝのふりかへるまゝ  
雲をとりて雲のまゝをたたく  
法水の珠敷よりや花のま  
りまをちよひて舞の抱こち  
る溜りてなまき人か春をむ

夏の部

あなをよもまゝのまゝ  
東を母なるまゝをよ  
あなをまゝのまゝ人か  
小石の女の人か  
西行のまゝをたたく  
ほろろとまゝを  
耳のまゝを  
舞たてまゝの時

西行のまゝ  
あなをよもまゝのまゝ  
そのまゝのまゝ



南無阿弥陀仏の御名をうたへて  
 ごとくと僧都の實やかんが  
 心よふをまよふ形もよやうか  
 清佛やまをくらま願はかよと  
 拜月八日死して生るるに佛  
 日光の出にも照れるおみお  
 不動画く琢磨らたのおみお  
 金屏のいゝやうにうたへる  
 南無阿弥陀仏の實や禰西寺  
 ほしたんやうらゝの猫こゝの  
 おみおのまよりいゝに  
 ち二十の目もらうりおみお南  
 方るまをいゝおみお  
 ちと草も刈り捨てお家のおみお  
 海おの流をいゝおみお  
 山標の雨風をいゝおみお  
 蟻塚  
 蟻まをいゝおみお

南無阿弥陀仏の御名をうたへて  
 ごとくと僧都の實やかんが  
 心よふをまよふ形もよやうか

清佛やまをくらま願はかよと  
 拜月八日死して生るるに佛  
 日光の出にも照れるおみお



嗟哉行

短夜のつらさをとめて大井川

暮しのあやせむしをふ植のよ

短夜のつらさをとめて大井川

かしのあやせむしをふ植のよ

短夜を首白峰山の秋と雲

祇と竹まきやうららかなる小倉

元山や志やうちよはせせむし

巫女甲によまゝぬすます卯月

ぬすます卯月の徳の袖

金ものふよりのをいふこと

白いぬのを吹井一歩の恒報

若柳のついで書に解をいらす

若柳のついで書の解をいらす

大矢敷のついで書の解をいらす

かきのついで書の解をいらす

ほのついで書の解をいらす

巫女甲に  
よまゝぬすます卯月の徳の袖

白いぬの  
上五文字の下「の」のむしを  
や井あう里いともあうら

少るの  
玉梅をふの付白に「の」をいらす  
まゝのぬしをふにたむしをいらす  
あう念者の男色をいらす



美お梅也草一麻作る丘等  
美お梅也草一麻作る丘等  
をちりせんに流のきりやうきり  
山畑をちりせんに流のきりやうきり  
般美もくちりせんに流のきりやうきり  
夜きりやうの帆にきりせんに流のきりやうきり  
谷きりやうの人と少きりせんに流のきりやうきり  
海河の面一東すこりせんに流のきりやうきり  
浅る山畑の中かきりせんに流のきりやうきり  
物比たふら曲るきを流のきりやうきり  
初松色観世大夫うけ一居外

影幽子寮

為せきり紙魚お拂ふ窓か前  
賣ト先生本を窓のつれれ  
暎の句を結てころん膝乃腹  
魚美いころんか七回  
各句をこころんか七回



山則讚佛塔の目まぶし

梢より放つ後まはさるるのむ  
 白白ぶ子のねさよ柳敷帳  
 こゝろんよまぬ帳まは法師の  
 腹あーさ隣向すの牧まゝに  
 朋易まねや稲妻の鞠まゝに  
 策や立助白鳥のまゝの中  
 牛のもや垣のまゝを不動堂  
 塔から小我たぐさの細き小  
 策をまはるるのまゝの卯  
 若牛やすものまゝの若のまゝ  
 若牛や是作もまゝのまゝ  
 りのまゝや村百軒のまゝのまゝ  
 若秋や鼯啼まゝのまゝ  
 若秋や揺りの櫓のまゝ  
 若秋や狐のまゝのまゝ  
 若秋の秋淋まゝのまゝ  
 若秋て瓜の花まゝのまゝ



飯盛玉狐遣ふあやまの秋  
 けりきり ぬききり 人あまきり  
 鮎つけておろてまにたる 魚を介  
 鮎すやまきねの地におまわる  
 鮎おーてまけ 鮎ふいりり  
 鮎をおすまき酒盛す隣ーまき  
 すをふす石上たけを敷まき  
 まー桶を洗くは 洗き 鮎魚介  
 けいさけのまきけや 鮎のまき  
 卓上の鮎に眼さし 観魚さ  
 すの石にまき人の鐘のひまき  
 寂寞とまき間をすのまきか 減  
 まき梅や 微雨の中行 飯煙  
 まき梅やまきまきまきまき 豊後梅  
 青梅や 捧心の人垣を聞ハダク  
 かけおろの隠れはまき 破れ傘  
 袖のまきや ゆりーまき 母屋の乾隅  
 袖のまきや まき酒盛す屏の内

飯盛玉狐遣ふあやまの秋  
 けりきり ぬききり 人あまきり



夏山や  
しらにきく白鷺也

橋やちうーかのうら夫取  
夏山や卯の名をいさかふにきく  
夏山や糸をいふはきく  
麻を刈くと名のこころ斜き  
ぬたけしうーちみんくまきう  
酒を煮る家の女房ちよほれ  
しよさや舟まきまきうのま  
洪柿のそ散る風と成にう  
柿のそきうーお散ると黄はくま  
床下旅の窓りやまきく  
五月るや冷海を衝く濁る  
まなるやぬに銚きまきく  
濁るよ船のまきく結や五月る  
榻まぬはきくけりや白半雨  
まきくりや船まきくまきく  
鼻の白やまきく船の社燈清る時  
船伽木何のまきくまきく  
あらぬて小みあらぬまきく



五月三日の堀りよーさ岩るぬ  
 廿五日のつらさるる中々女と那  
 しくお早も沈む斗と五月雨  
 ちうさるやあさるさる鼻一可  
 ちみられやちるぬの徑をくし  
 五月三日にんえいひさるぬの  
 紙燭して廊下さるや五月  
 五月三日のわくさるさる自ら  
 討つてす梵倫つ水さる夏ゆ  
 お古ふ御田に苗乃みさる那  
 りやとそ姫もさるら田植介  
 海かけの伯母もあれつ田植介  
 参河さる八橋もちうさ田植介  
 二つさるさるさる中お乃田植介  
 今の員田さるさるさるれり  
 瀬をわしさるさるさる田植介  
 おそのほむれも田に引くさる外  
 子と女や佐けのさるさるさる



葉の下の陰を。田草取  
 蹇のニ然もつや。蝸牛  
 ついである。ソコ車や。智牛  
 點滴に。くれて。こも。か。つ。つ。つ  
 か。つ。つ。つ。何。の。角。の。長。短  
 及。魚。の。名。を。白。なる。指。河。外  
 味。増。汁。を。く。ら。ぬ。娘。の。身。を。介  
 た。ま。し。て。拂。ふ。る。ま。の。柱。の。那  
 ま。と。海。平。兵。船。や。夏。の。月

家。み。つ。て。懺。ん。で。さ。る。り。家。微。小  
 木。か。と。り。て。名。差。の。や。み。の。懺。め。さ  
 には。の。さ。び。し。く。方。や。自。ら。い。ま。は

米屋の因縁

や。さ。し。さ。よ。さ。ま。の。花。は。く。る。の。中  
 茶。を。た。た。て。火。車。に。燈。の。進。む。る  
 窓。は。く。火。車。も。け。ぬ。雨。の。ひ。ま  
 射。干。し。て。舞。く。さ。の。か。け。ら。が  
 一。司。や。さ。も。火。車。に。白。さ。を。い。ら。ぬ。

米屋の因縁  
 米屋の因縁  
 米屋の因縁  
 米屋の因縁

射干の二字をあらわす  
 射干の二字をあらわす  
 射干の二字をあらわす



おぼろげな月夜に  
おぼろげな月夜に  
おぼろげな月夜に

影の  
はこぼれと影を  
おぼろげな月夜に  
おぼろげな月夜に

谷川にけし木吹くもる大津可和  
久し方のよさを年々をばかしく  
袖まに毛生を志ふ古御厨子  
我水に隣一家の柳の毛生が  
影の毛を吹くもる毛生が  
朝風に毛を吹くもる毛生が  
禪に團扇さす亭主が  
汝煙消えそ山より月を涼  
出羽のふより陸奥の方へ

通うけらに山甲より日くれ  
丸れば辛うして九十九夜と

とる村にたよりつきて空仰  
よもめぬ夜すいらとて  
物のちのりくちあらはれい  
あやしくてきこえたるはち  
の廣さをいそよそよする  
をづくしそあらうそよそ  
とら細細けりた月孤



山峯の頂をてらり一峰千峰  
の井を覗き朗おのけい  
りあまのちりけをのちる直  
の鼻あたまをとりそわく  
那むあまのまをわのこま  
こまを何とらふまを  
兵法とまふ

涼しきに夢を月夜の卯かき

宗阿三十三回

むの雲三浦にあまねこの岩  
女を巻の主河朝世歌を  
志すい居を洛東にうらす  
こ榻を下せる野の川れに衣  
をふるいに檻にすれは白  
河の下地よきを濯く宗徳  
法妙のすまもにも住めり  
まゝその中こらあにるあ  
住居とあうり



葛のくに  
うらそにうらそに作

浮草の花押をけて白の露

葛のくにうらそにうらそに志の真

その聲二句

葛のや鏡に白のうらそ時

葛のやうらそにうらそにうらそに

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

秋の部

病記

秋帳に鬼を管うらそに秋  
秋の秋帳あうらそにうらそに  
照るやうらそに秋を思ひあを  
穢多おとろ消え秋うらそに切花は  
志うらそに切花にうらそに秋  
細腰の法師あうらそにうらそに  
錦木の州を免うらそにうらそに



猫と魚の茶のたまりぬこ

枚子の村の碓画也

爺の婆も猫も枚子もをさうふ  
稲妻やこおこお 剣澤  
頭ら家にかゝるや角力取  
古の坐敷にゑのぬり力取  
萩のてま田格ゆくふれり  
黄ばや萩の鼠のこる甚む古  
油取て岩にあや那をすす

太祇十三回忌

線香やすすりゆの甚ここ本  
鬼角一と一把におらぬ女む  
夢跡の秋我うらより人せ集  
朝に持る人さふあやおすの  
あまやも烟のつらあまも纏  
近頃のものはさして角つら

狐の住ぬこにる魚に

たふらぬの身や昔よりあまの書も借れ



人を取らぬ倒れをけしらすお宿の中  
自弁ちつたるも木海へ一吸ふ本を  
初夕や朝日の中に伊豆お損  
自さおめめく実ありそらりり  
魚に身を碎くや一夜あすこら

ふ思

宗祇家を恋し初眉まに目のかたむく  
宮の行をよも山もあつてを唐のま  
きつたる唐や伏猪の枕もと

江洲  
本集にかたしきやに作る  
俳洪ら家集にふきる  
の傍さしものて江洲と  
ありお白を

江洲へ釣糸あく 秋の風  
思ひ出で酔つては伝は秋の風

画賛

秋風のふきり倒す障りあふ  
一つおのうし古白をそはうを  
子狐のこころ 秋をゆく  
綿とるや大を家路に遠やは  
棒突いては庄屋をたふす  
おふやんを海のうらみ 遠れ



山賊のさきにてはくすむかふ那  
掛福に陣つゝある門田の南  
白草や庭にすゆつて田舎の  
枯枝に醜態をくさるるを  
花山やさくさくある柳もさ  
庭のあひ田母のうらみとさくさく  
新米もまゝの草のうらみの白り  
大方に思ふはらへるるをさ  
油買つてはるるさあ海の魚橋  
の燭してよまゝいふさ出す  
心にとさ草山越ゆる船の

宇治行三句

君のよや拾道の草の夜五本  
船着ていよゝまふ屋上の那  
帛をさく琵琶の流るる秋の  
雞の根よさつちかお草かた  
終のちまのまぢさるるつらま

城南郊のふ

山賊のさきにてはくすむかふ那  
掛福に陣つゝある門田の南  
白草や庭にすゆつて田舎の  
枯枝に醜態をくさるるを  
花山やさくさくある柳もさ  
庭のあひ田母のうらみとさくさく  
新米もまゝの草のうらみの白り  
大方に思ふはらへるるをさ  
油買つてはるるさあ海の魚橋  
の燭してよまゝいふさ出す  
心にとさ草山越ゆる船の



腹安き僧の餅く城南  
水舟や秋の月まなくあつち  
川秋のよよこせしりたま  
戸をたぐ狸と秋を惜ま

冬の部

時々のや用言のしよふ午  
翔りの謎ふしよ時白のわ  
絶々の雲のしよすし物しれ  
雪の舟に素のあそ時ひり  
化さるぬ午かすまの時のし  
舟草のまをたのれぬ時  
端のまのよをのりくも行  
まのまのまをのりくも行

Roanoke  
1772



冬やことし  
比の重なるよりに冬を  
に作る

冬やことし  
冬花の雪を射る  
戸に衣の掛つて  
冬草の折ぬき  
物奥りの狭い  
炉屏お先ある  
村の音なり  
一陣おる白く  
おるを吹雪あり  
おるや折竹を  
西の東

大星力保の賛

炭團  
一に山を依に作る  
てらくくと  
本集に著條とて石に  
日の入る林ゆかりあり  
てらくくと石に日の照る林ゆかり  
山を越す人に  
畑にもをら作悲し  
炭ゆかり



雪の鯨鯨鯨の上んまんとす  
生つ折半やゆの上の捨つ少半

大根の画賛

此名ゆりのひけつらうせよ土大根  
雨おちすそを 時おきく  
大舌をたうらう 時のたれし  
以印ゆらりらるる人にすか  
ハ乾梅彷彿とてみても梅

古丘

あ仙に執持少や ちる月扱  
鉄をんむの年の月のまきこの那  
扱たふふさる。少家もささぬ鉢叩  
陣たささくからや扱の都さ  
すむすむの目代えは ちる給家か  
乾鯨や少おのすもま 枯れ後  
から鯨の片着やち扱の山儀  
おとつちりさるおたさるはる氣い  
さるや僧にりあふ扱の上



さくら

鐘をききて鐘撞を合シキミにけす  
空垢離や上の田一よきまうり  
空垢離に風を向けうつろき馬  
山瓦一モリ二の鋤の懐この那  
茶竹の雨屋生を起す小てす  
節季の候まうり市名白ま衣ふ  
古木のゆや面つまぬぬぬぬ  
野郎一ハミ障子に羽打河まふ

土器土壺賛

面影もあけらけ〜と〜の市  
少年のあやう〜と〜茶釜土壺  
ゆ〜の女ハミ勢もあやうおの梅



燕窩の白糸拾遺終







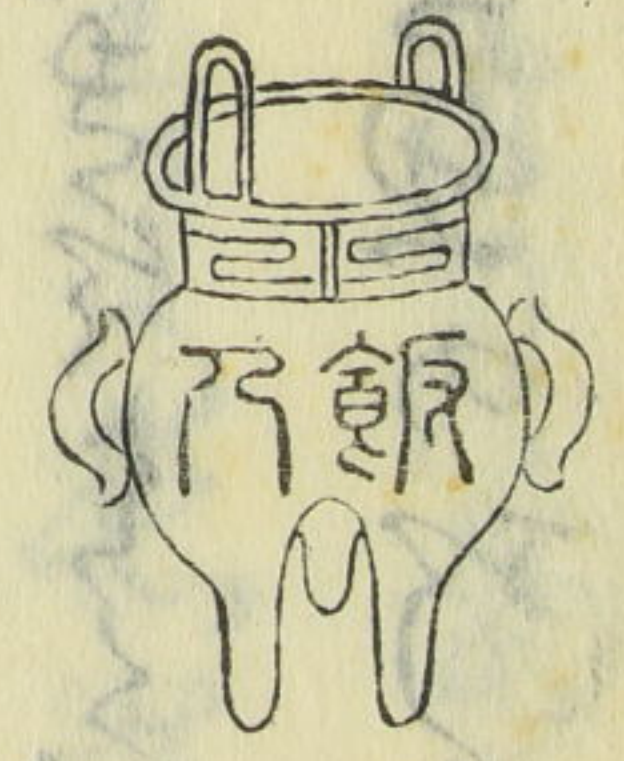
明  
明  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

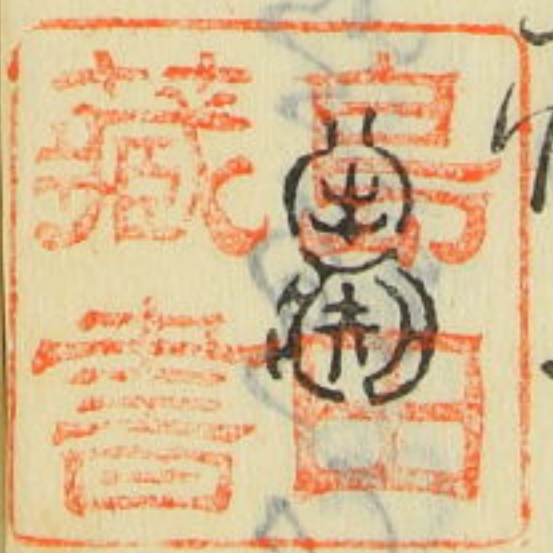


明治三十年五月三日

飯ノ海



佐藤寛



明治三十年四月三十日 印刷

明治三十年五月三日 發行

東京市神田區表神保町五番地

編輯兼發行者 佐藤 寛

東京市日本橋區大傳馬塩町十三番地

印刷者 西村多三郎



